

# 長岡市内遺跡発掘調査報告書

— 栖吉北部地区 —

2 0 0 1

長岡市教育委員会

## 序

長岡市内では、近年ほ場整備事業に伴う遺跡の発掘調査が盛んになってきました。平成4年度から長岡市教育委員会が発掘調査を行った遺跡は、西暦1450年前後の元号と思われます「文明」の文字が墨書された木札が出土した栖吉町松葉遺跡、縄文時代中期から晩期の集落跡と中世の地下式横穴などが重複していた中道遺跡、弥生時代の集落跡と方形台状墓などが発見された藤ヶ森遺跡、それに弥生時代から古墳時代の集落跡の五斗田遺跡など、長岡市の歴史を考える上で貴重な資料を得ることができました。

平成12年度に調査を行った栖吉北部地区は、長岡市農業協同組合（当時）が事業主体となっただけでほ場整備事業が計画されている地域です。長岡市教育委員会では事業計画と遺跡の保存方法について、協議するための資料を得ることを目的に遺跡の確認および試掘調査を行いました。調査の資料は、ほ場整備事業の設計を行う際の参考として長岡市農業協同組合に提供しました。今後は、長岡市農業協同組合が設計した計画案と遺跡の保存について協議を進め、埋蔵文化財保護に遺漏のないように努める所存です。

今回の調査にあたっては、事業主体の長岡市農業協同組合および地元の栖吉第二地区ほ場整備協議会をはじめ、御指導・御協力をいただきました関係団体および方々に心よりお礼を申し上げます。

平成13年3月

長岡市教育委員会

教育長 笠輪春彦

## 例 言

## 目 次

- |  |  |
|--|--|
| 1 本書は、平成12年度に栖吉北部に計画されたほ場整備事業地内を対象に実施した市内遺跡発掘調査の記録である。 | 1 調査……………1<br>(1) 調査に至るまで……………1<br>(2) 調査の経過……………1 |
| 2 調査経費は、国庫補助金と県支出金の交付を受けた。                             | 2 環境……………2<br>(1) 地理的環境……………2<br>(2) 歴史的環境……………2   |
| 3 調査は、長岡市教育委員会が主体となり、文化財保護法の調査担当者を駒形敏朗として実施した。         | 3 タチアガリ……………3                                      |
| 4 本書の作成は駒形が行った。  | 4 村下遺跡……………4                                       |
| 5 調査の記録は、長岡市教育委員会が保管している。                              | 5 ジッチョウイン……………5                                    |
| 6 陶磁器については安藤正美氏からご教示をいただきました。心からお礼を申し上げます。             | 6 ソデクネ・タテノコシ……………5                                 |

## 1 調査

### (1) 調査に至るまで

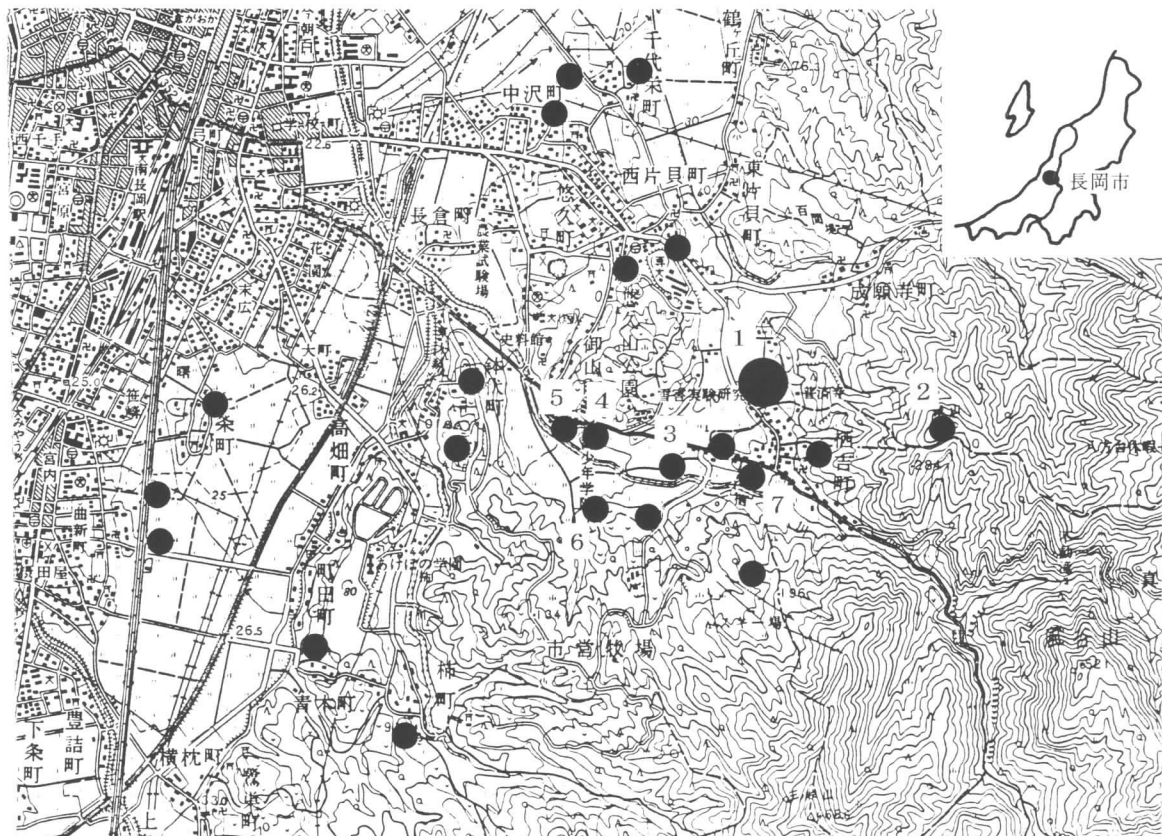
長岡市栖吉地区は、越後上杉氏の祈願所であった普濟寺と、古志長尾氏が居城とした栖吉城を中心に発展してきた中世の伝統を受け継いでいる集落である。この栖吉地区は昭和59年に三貫梨遺跡の確認調査以来、栖吉川沿岸の15世紀代の中世遺跡を中心に発掘調査などが数多く行われてきた。

このたび、栖吉町の北部地域を対象に、長岡市農業協同組合（以下「農協」と言う）が事業主体となって計画された。計画地には周知の遺跡である村下遺跡のほかに、栖吉城跡の居館跡や普濟寺に関連するであろうタテノコシ・ジッチョウインなどの地名が通称名として伝わっている。

このため、長岡市教育委員会は遺跡の保護を目的に、農協と数回にわたって協議を行い、平成12年度中に村下遺跡や通称名の地域を対象に確認・試掘調査をし、調査結果を参考に遺跡の保存方法について再度協議することで合意した。そして、計画地にある村下遺跡や地名から未周知の遺跡が所在する可能性のある地域を対象として平成12年10月に遺跡確認及び試掘調査を行った。

### (2) 調査の経過

調査は、10月2日に調査事務所用のハウスを設置し、調査機材の搬入から始めた。3日は降雨のため、4日にタチアガリからバックホー及び人力による試掘調査を開始した。調査は、タチアガリ、ソデクネ①、ジッチョウイン①、村下、ソデクネ②、ジッチョウイン②の順で行い10月16日に終わった。



第1図 調査対象地および中世遺跡群（1/50,000 長岡）

- 1 調査対象地
- 2 栖吉城跡
- 3 中道遺跡
- 4 三貫梨館跡
- 5 三貫梨墳墓
- 6 松葉遺跡
- 7 下道埋蔵銭出土地

## 2 環境

### (1) 地理的環境 (第1図・第2図)

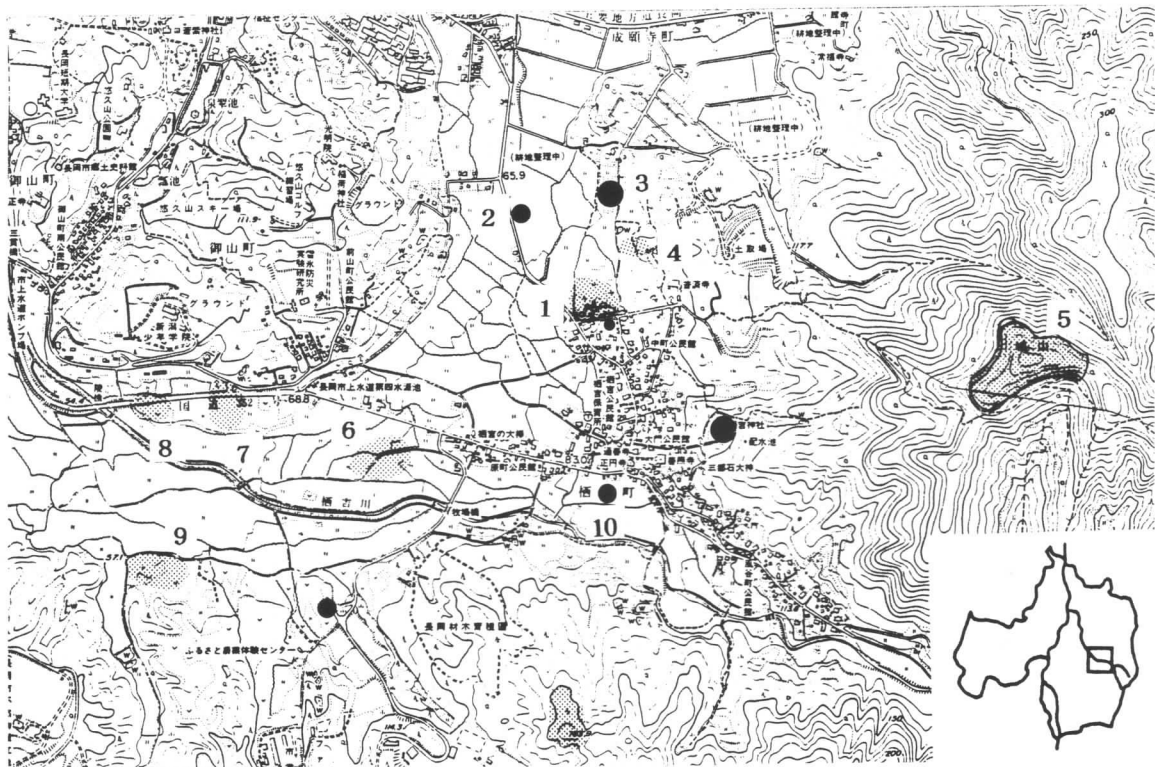
調査対象地(ほ場整備事業計画地)は、信濃川の右岸で、南北に連なる通称「東山」の西麓に位置する。東山からの栖吉川が、谷口扇状地を形成しながら信濃川に向かって流れている。栖吉の集落は、東山の裾に沿った栖吉川の右岸に展開している。調査対象地は栖吉集落の北端部に広がる水田や畑である。

調査対象地のうち、タチアガリは悠久山との間の扇状地に、村下遺跡は東山の西麓が扇状地に落ちるところに、ジッコウインは東山の裾に位置している。ソデクネは集落の北端部で、東山の裾が北側に傾斜するところに位置し、栖吉城跡や普済寺に続く裾部とは南からの沢で隔てられ、西や北は扇状地に続く。この沢と扇状地がタテノコシの地名が残るところで、ソデクネを取り巻いている。

タチアガリの標高は67m、現況は水田。村下遺跡は標高71m、現況が畑である。ジッコウインは上下二段に分かれ、上段の標高が84m、現況は荒地、下段は標高74m、現況は畑である。ソデクネは標高が南が77m、北が74m、現況は南に畑が広がり、西から北は水田となっている。

### (2) 歴史的環境 (第1図・第2図)

栖吉には中道遺跡、三貫梨墳墓、三貫梨館跡、下道埋蔵銭遺跡、松葉遺跡などの中世遺跡が多数存在している。中道は地下式横穴などが検出された遺跡、三貫梨墳墓は土葬と火葬の墓地、三貫梨館跡は寺院跡の可能性が高い館、松葉は「文明」墨書の木札を出土した集落、下道は14世紀中ごろの埋蔵銭出土遺跡である。これらはいずれも栖吉川沿いに所在する遺跡である。これに対し、栖吉北部には15世紀末から16世紀初頭に長尾氏が拠点蔵王堂城から移転した栖吉城があり、長尾氏の移転に伴って栖吉川沿岸から15世紀に松葉や中道の集落、三貫梨寺院(?)などもこの地域に移転してきた可能性が高い。



第2図 調査対象地付近の中世遺跡群 (1/20,000)

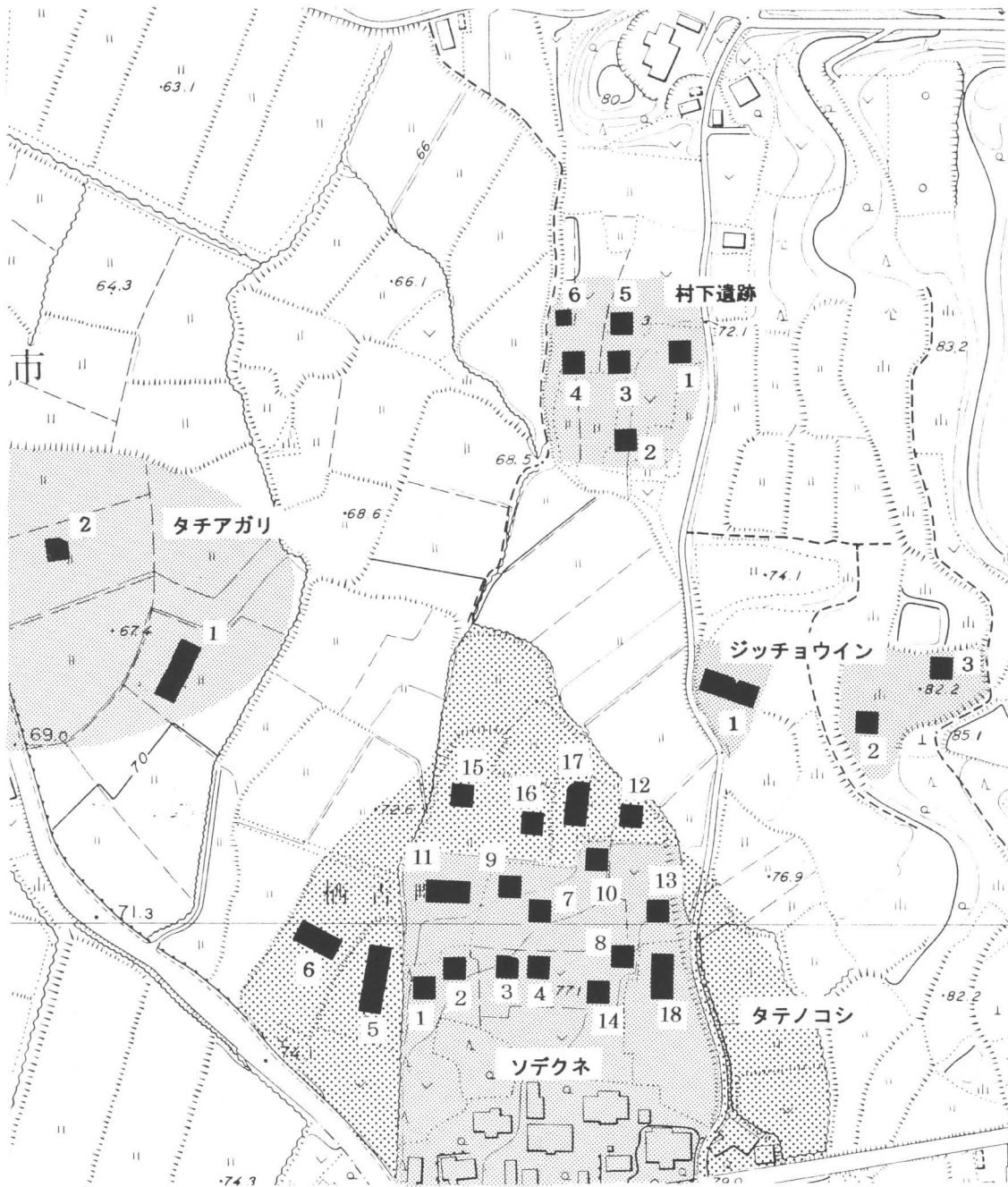
- 1 ソデクネ
- 2 タチアガリ
- 3 村下遺跡
- 4 ジッコウイン
- 5 栖吉城跡
- 6 中道遺跡
- 7 三貫梨館跡
- 8 三貫梨墳墓
- 9 下道埋蔵銭出土地

### 3 タチアガリ

**調査 (第1～3図)** タチアガリは「館」の読みに通じる地名で、栖吉山城の館(根小屋)に関係する施設の存在が予測された地域である。調査地の北側で、ほ場整備事業地外にもタチアガリの地名がある。調査対象地は南側に谷頭をもつ大きな沢状の水田に位置している。調査トレンチを2本設定してバックホーで発掘する。調査の概要は下表のとおりである。調査面積は48㎡。

**土層序 (第4図)** 1 Tは表土下に黒褐色土が堆積しているが、2 Tの地山は表土直下での青灰色粘土である。そして、1・2 Tともに表土直下で湧水となる。

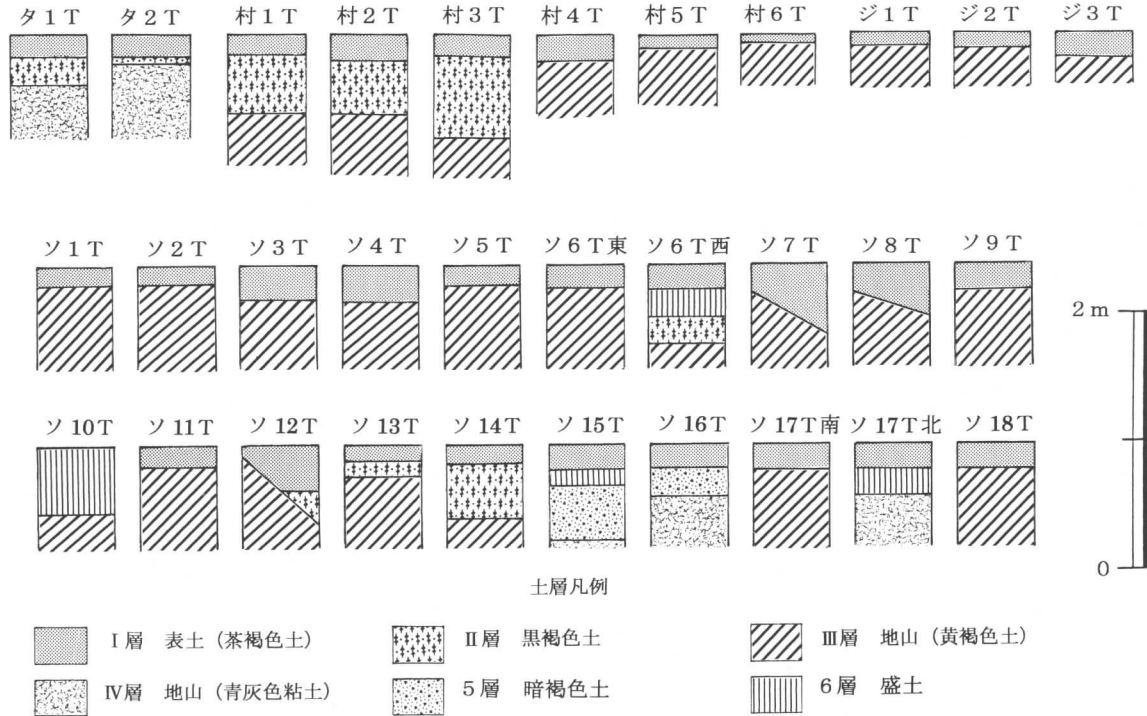
**まとめ** タチアガリは遺構・遺物ともに検出されず、地山が滞水性の青灰色粘土であり、調査地が沢であることなどから、調査対象地は遺跡とは考えられない。



第3図 調査グリッド図 (1/2500)

・タチアガリ調査概要表

トレンチ	規模(m)	深度	地山土	遺構	遺物	特記事項
1	2×20	4.0	青灰色粘土	なし	なし	特になし
2	2×4	1.5	青灰色粘土	なし	なし	特になし



第4図 土層柱状図 (1/60)

タ=タチアガリ 村=村下遺跡 ジ=ジッチョウイン ソ=ソデクネ

#### 4 村下遺跡

**調査** (第1～3図) 村下遺跡は、縄文土器や珠洲焼の破片が採集された周知の遺跡である。遺跡の位置は、東山丘陵の裾に南北に細く広がる平坦面である。確認調査のトレンチは6ヵ所設定し、バックホー及び人力で発掘を行った。調査面積は48㎡。遺構・遺物は確認されなかった。

**土層序** (第4図) 村下遺跡の土層は、表土・黒褐色土・黄褐色土の地山が基本である。地山までの深度は、60～80cmのところもあるが遺物は出土せず、黒褐色土を遺物包含層とみなすことはできない。

**まとめ** 村下は周知の遺跡であるが、今回の調査では遺構・遺物ともに検出されず、遺跡と見なすことは、今回の調査対象地とした地域では少なくともできない。

・村下遺跡調査概要表

トレンチ	規模	深度	地山土	遺構	遺物	特記事項
1	2×4	6.0	黄褐色土	なし	なし	特になし
2	2×4	6.0	黄褐色土	なし	なし	特になし
3	2×3	8.0	黄褐色土	なし	なし	特になし
4	2×6	2.5	黄褐色土	なし	なし	人頭大の礫が多い
5	2×4	1.0	黄褐色土	なし	なし	地山直上に人頭大の礫
6	1×6	1.0	黄褐色土	なし	なし	特になし



## 5 ジッチョウイン

**調査** (第1～3図) ジッチョウインは実相院(ジッソウイン)が訛化した地名と考えられること、下段の調査対象地が、寺院跡の所在する可能性がある地形を有することなどから調査を行った。また、上段は普濟寺が管理する墓所の下に広がる平坦面であり、実相院の故地あるいは未周知の遺跡が所在することも考えられ、試掘調査を行うことにした。下段は畑、上段は荒地である。下段の調査はバックホーで発掘し、上段はバックホーが上れないため人力で発掘した。面積は48㎡。

**土層序** (第4図) ジッチョウイン下段の1Tの土層は、10cmの表土ですぐに黄褐色土の地山となる。発掘の状況からは、すでに開墾等で旧地形が削平されたものと思われる。上段2Tも下段1Tとほぼ同様である。上段の3Tは表土上面から地山までは20cmとやや深いが、黒褐色土の堆積は薄い。

**遺物** 各トレンチからは碗や猪口など、18世紀から19世紀の瀬戸美濃・関西系・肥前焼の近世磁器の破片が11点出土している。中世の遺物は出土しなかった。

**まとめ** ジッチョウインは、普濟寺に関係する実相院(ジッソウイン)が訛ったものと考えられている。実相院の所在地は不明であるが、通称地名からと1トレンチがある広がりには寺院跡に類似することなどから、調査場所が実相院比定地の一つと見られていた。しかし、遺構・遺物ともに発見されず遺跡とは考えにくい。地山面までの土層堆積が1Tで10cm、上面の2・3Tで12ないしは20cmと浅く、場合によってはすでに開墾等でジッチョウイン遺跡が削平されたことも考えられる。

### ・ジッチョウイン調査概要表

トレンチ	規模	深度	地山土	遺構	遺物	特記事項
1	2×20	10	黄褐色土	なし	近世磁器	特になし
2	2×4	12	黄褐色土	なし	なし	特になし
3	2×4	20	黄褐色土	なし	近世磁器	特になし

## 6 ソデクネ・タテノコシ

**調査** (第1～3図) ソデクネとタテノコシは、栖吉山城の麓に位置する普濟寺から下がったところで、栖吉本村集落の北側に続く平坦面(ソデクネ=第3図濃い網掛部分)と、それを取り巻く沢を含む地域(タテノコシ=第3図粗い目の部分)の通称地名である。タテノコシは堀を指す地名であることが多く、ソデクネの東側の沢と西・北の一段低い水田が堀と推定される。

畑地の調査は、作付けをしていない畑に2×4mのグリッドを基本に設定して人力で、水田はトレンチを設けてバックホーで発掘を進めた。設定したグリッド・トレンチは18ヶ所、発掘面積は318㎡である。

**土層序** (第4図) 畑地であるソデクネの土層は表土・黒褐色土・地山の三層で、縄文土器を出土した14Tで包含層が存在すると考えられるが、他のグリッドでは存在しない。水田のタテノコシは表土・地山の二層が基本土層である。水田は個別の水田造成が行われ、表土の直下が地山となる箇所や、山側を削った土砂を地山の青灰色粘土の上に盛った箇所、地山面が傾斜しているところがある(7・8・12T)。

**遺構** (第5図) 5Tの遺構は北側に溝、中央部にピット、方形区画の落ち込み、不整形の落ち込みなどがある。溝は幅約1m、確認面からの深さ約30cmで、17世紀後半～18世紀前半の肥前焼の碗が1点出土した。中央のピットは、直径1mで30cmほど掘り下げたところ、若干粘質を帯びた黒色土が充満しており、遺構の可能性が高く、形態や規模などから井戸と推定した。不整形のピットは、方形に近い形態で、深さ約35cmである。その他の落ち込みは規模が大きいが、遺構か否かの判断は現場ではつかなかった。

17Tはトレンチのほぼ中央部に、北側に青灰色粘土、山側の南には黄褐色土が堆積していることが明瞭に境界線を挟んでみられた。そして、黄褐色土の地山側に直径15～20cmの小ピットが境界線と平行に並んでいた。青灰色粘土部分は堀跡、小ピットは館側に設けられた柵列の可能性が高いといえよう。

その他、7・18Tで方形区画の落ち込みが、13Tでは南北に走る段が確認された。7 T及び13Tの落ち込みを発掘したが、遺物を伴わないことや、落ち込みの覆土に締りがいいことなどから遺構とするには若干の無理があり、全体を発掘した上で結論を出したい。段は畑の区画溝かとも思われる。

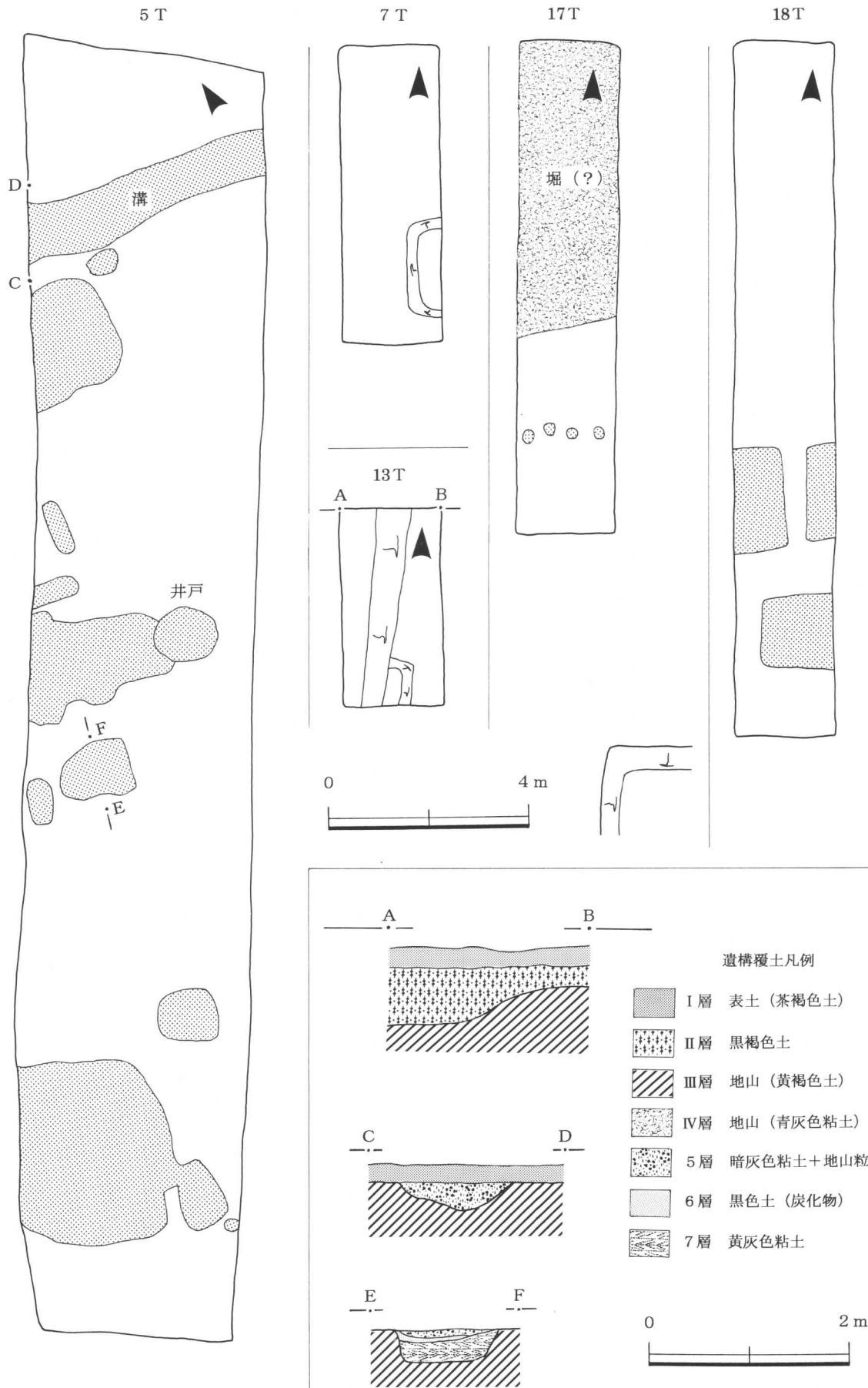
・ソデクネ・タテノコシ調査概要表

トレンチ	規 模	深 度	地 山 土	遺 構	遺 物	特 記 事 項
1	1.5×4	1 5	黄褐色土	なし	近世磁器	特になし
2	2×4	1 5	黄褐色土	なし	なし	特になし
3	2×4	2 5	黄褐色土	なし	渡来銭 近世磁器	銭は「元■■■寶」
4	2×4	2 5	黄褐色土	なし	なし	特になし
5	4×26	1 5	黄褐色土	井戸・土壙	珠洲焼・越前焼 中世瀬戸美濃 近世磁器	遺構の種類から屋敷跡と思われる。
6	2×16	1 8 6 0	黄褐色土	なし	なし	地山が東から西へ傾斜
7	2×6	3 0 5 6	黄褐色土	土壙(?)	近世磁器	土壙の性格は不明 地山が南から北へ傾斜
8	2×4	2 0 4 0	黄褐色土	なし	近世磁器	地山が南から北へ傾斜
9	2×4	2 0	黄褐色土	なし	なし	特になし
10	2×2	5 0	黄褐色土	なし	中世瀬戸美濃 近世磁器	表土はかく乱
11	2×20	1 8	黄褐色土	なし	近世磁器	特になし
12	2×4	1 0 6 0	黄褐色土	なし	近世磁器	地山が南から北へ傾斜 包含層(?)の存在
13	2×4	4 0	黄褐色土	段	瓦質土器 近世磁器	西側に高さ50cmの 壇を確認
14	2×2	5 6	黄褐色土	なし	縄文土器 近世磁器	包含層が存在
15	2×3	7 3	青灰色粘土	なし	近世磁器	特になし
16	2×5	1 8 4 0	青灰色粘土	なし	近世磁器	地山が東から西へ傾斜
17	2×10	2 0 4 0	黄褐色土 青灰色粘土	堀(?) 柵列(?)	近世磁器	地山が、青灰色粘土と黄褐色土と分かれている。
18	2×12	2 0	黄褐色土	方形土壙3基	近世磁器	土壙の性格は不明

遺物 (写真) ソデクネ・タテノコシからは陶磁器が出土しているが、中世の遺物は5 Tの包含層から珠洲焼と越前焼の甕の胴部破片、5 Tピット出土の瀬戸美濃小皿、10Tの瀬戸美濃、13Tの瓦質土器(土風呂)の5点である。その他、北宋銭の「元■■■寶」(破損)が3 Tで出土した。それ以外は近世の磁器の破片で、主に18世紀から19世紀の肥前焼である。なお、縄文土器が14Tから5点出土している。

まとめ ソデクネ・タテノコシの試掘調査では、主に5 Tで溝や井戸(?)などの遺構と珠洲焼・越前焼などの中世の遺物が検出された。そのほかに縄文土器が集落寄りのグリッドから出土した。遺物の出土量や確認された遺構が少ないことが気になるが、遺構と思われる井戸や堀などが確認された5 T・17Tの地域はもちろん、それに囲まれたソデクネの部分に屋敷跡が広がっていた可能性があると考えられる。





第5図 ソデクネ遺構確認状況図 (1/120)



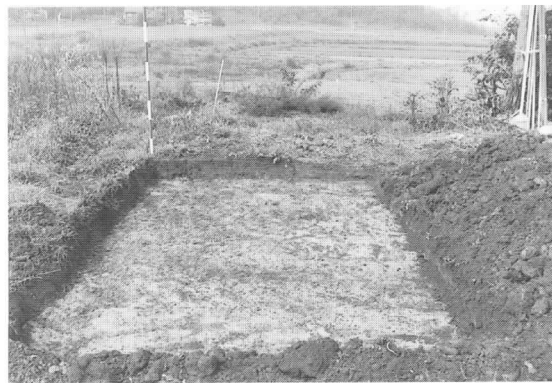
栖吉城跡



村下遺跡近景（南から）



村下遺跡調査風景



村下遺跡 5 G 完掘状況



タチアガリ調査風景



タチアガリ 1 T 完掘状況



ジッコウイン遠景（西から）



ジッコウイン 1 T 調査風景

写真1 栖吉北部地区の調査



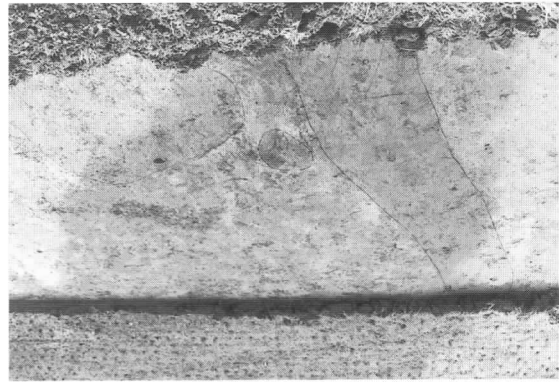
ソデクネ・タテノコシ遠景（南東から）



発掘風景



5 T遺構（？）確認状況



5 T溝跡確認状況

写真2 栖吉北部地区（ソデクネ・タテノコシ）調査

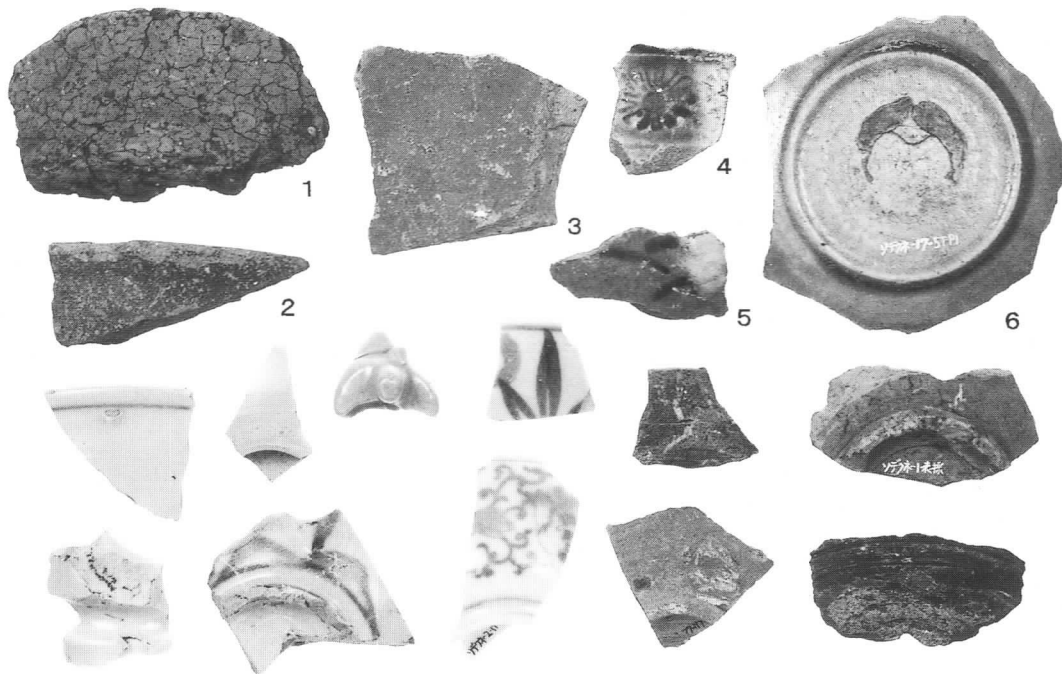


写真3 ソデクネ出土土器

1 縄文土器 2 珠洲焼 3 越前焼 4～6 瀬戸美濃焼 その他は近世磁器

# 報 告 書 抄 録

ふりがな	ながおかしないいせきはくつちょうさほうこくしょ								
書名	長岡市内遺跡発掘調査報告書								
副書名	栖吉北部地区								
巻次数									
シリーズ名									
シリーズ番号									
編著者名	駒形敏朗								
編集機関	長岡市教育委員会								
所在地	〒940-0072 新潟県長岡市柳原町2-1 電話番号 0258-32-0546								
発行年月日	2001年3月25日								
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因	
		市町村	遺跡番号						
むらしも 村下	ながおかししまち あざむらしも 長岡市栖吉町 字村下2892外	15202	341	37°25'32"	138°49'00"	2000年 10月2日～ 10月16日	48	団体営ほ 場整備計 画地	
タチアガリ	同上								48
ジツチョウイン	同上2963外								48
ソデクネ・ タテノコシ	同上2780外								318
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項			
ソデクネ	館跡(?)	中世	井戸(?) 堀跡		珠洲焼・越前焼・ 瀬戸美濃焼				

## 長岡市内遺跡発掘調査報告書

— 栖 吉 北 部 地 区 —

平成13年3月25日発行

発行：長岡市教育委員会

印刷：第一印刷所